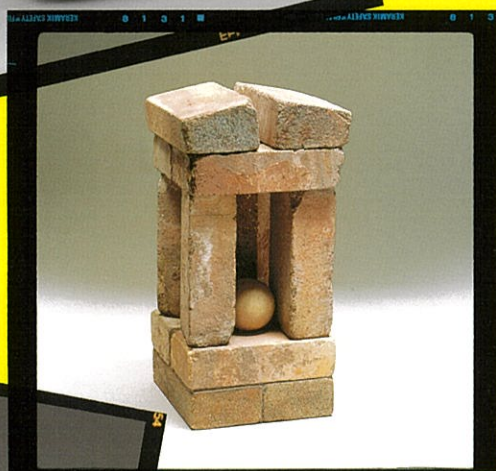


シゲキが  
いっ  
ぱい  
\*  
\*  
\*



アール・ヌーヴォーから現代作家まで

# ドイツ陶芸の 100年

## DEUTSCHE KERAMIK

1900-2000

Geschichte und Positionen  
des Jahrhunderts



平成13年10月6日[土]~11月25日[日]

休館日:月曜日(10/8を除く)、10/9 開館時間:午前9時~午後5時(入館は午後4時30分まで)  
観覧料:一般1,000(800)円/学生700(500)円 \*消費税込 \* ( )内は前売料金、及び20名以上の団体料金  
\*前売券はローソンチケットほか県内各所で販売しています。

\*70歳以上と18歳以下の方、及び高等学校と盲・聾・養護学校に在学する生徒は無料  
\*教育文化期間(11月1日~7日)中の開館日にはどなたでも無料で観覧できます。

主催:山口県立萩美術館・浦上記念館 / 関西ドイツ文化センター / 朝日新聞社 / YAB山口朝日放送  
後援:ドイツ連邦共和国大使館 / 大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館 / 萩市 / KBC九州朝日放送

協賛:DAIMLERCHRYSLER / ツアイト財団



山口県立萩美術館・浦上記念館  
HAGI URAGAMI MUSEUM

〒758-0074 山口県萩市平安古586-1 TEL.0838-24-2400/FAX0838-24-2401  
<http://www.hum.pref.yamaguchi.jp>



アール・ヌーヴォーから現代作家まで

# ドイツ陶芸の100年

## DEUTSCHE KERAMIK

1900-2000

Geschichte und Positionen des Jahrhunderts

多彩な釉薬が、ドイツの人たちを驚かせ、化学的研究が始まった——

今から100年ほど前、日本の茶陶が紹介されたときのことです。やがて彫刻家らも加わり、ドイツのアール・ヌーヴォーに当たるユーゲントシュティールのころから、創作活動としての陶芸が展開します。日本の影響がきっかけでドイツの創作陶芸が本格的に始まったのです。

1920年代にはバウハウス運動の洗礼を受け、30年代ごろから個人作家としての陶芸家が登場します。第二次世界大戦後の分断によって西と東の陶芸は別々の道をたどりますが、他の美術分野と似通った問題意識を持つ作家たちが自由で活発な造形活動を続けて現在にいたっている点は同じです。常に伝統を意識せざるを得ない日本とは違って、自由で清新の気に溢れているのがドイツの陶芸の特徴といえるでしょう。

この展覧会は約70名のデザイナー、陶芸家による約190点の作品を通して20世紀の歩みをたどります。東西が再び一つになってから初めて全体像を紹介する試みとして、日本国内を巡回後、2002年にはドイツでも帰国展が計画されています。

### 記念講演&ギャラリーツアー

#### ●記念講演

「20世紀ドイツ陶芸への極東の影響」

10月6日【土】13:30～15:00

講師：ハインツ・シュピールマン氏（シュレスヴィッヒ＝ホルシュタイン州立ゴットルフ城美術館館長）

「ドイツの現代陶芸」

10月20日【土】13:30～15:00

講師：木田拓也氏（東京国立近代美術館工芸課研究員）

\*いずれも定員80名【受付先着順】、聴講無料です。

#### ●ギャラリーツアー

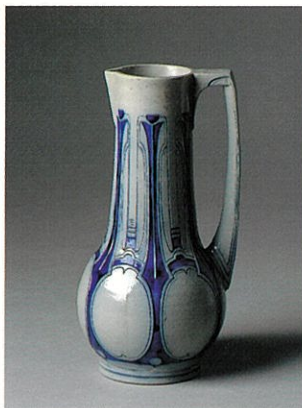
毎週日曜日 11:00～12:00に、担当学芸員による列品解説をおこないます。

山口県立萩美術館・浦上記念館  
HAGI URAGAMI MUSEUM

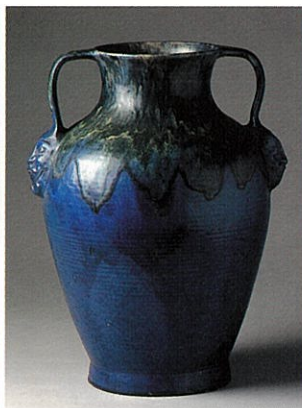
〒758-0074 山口県萩市平安古586-1  
TEL. 0838-24-2400/FAX. 0838-24-2401  
<http://www.hum.pref.yamaguchi.jp>



- JR東萩駅＝タクシー10分／まあ～るバス20分／徒歩30分
- JR小郡駅＝バス70分(萩バスセンター下車、徒歩15分)
- 石見空港(島根県松田市)＝バス75分(萩バスセンター下車、徒歩15分)
- 中国自動車道＝小郡I.C.、美弥I.C.各50分



ペーター・ペーレンス [塩釉水差] 1904



エルンスト・バルラッハ [双耳花器] 1905頃



リヒャルト・リーマーシュミット(デザイン)/ラインホルト・メルケル  
パッハ(作) [ランチ酒器] 1906頃



オットー・リンデッヒ [紐付注口水差] 1922



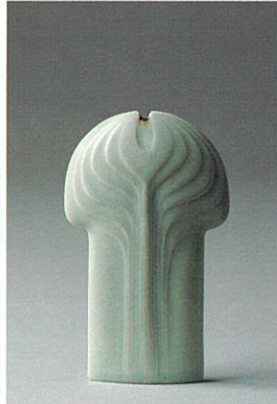
グスタフ・ヴァイダツン [水差] 1922-23頃



リヒャルト・パンビ [果実形花器] 1952



イェルク・フォン・マンツ [飾皿] 1969



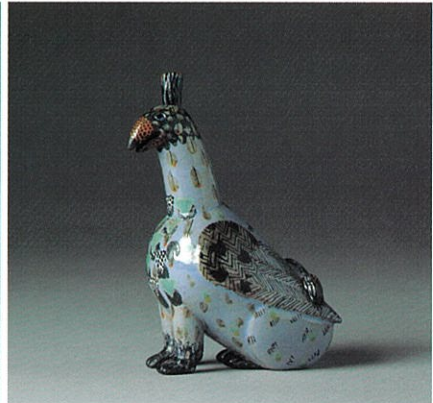
カール・シャイト [「小さな木」のフォルム] 1976



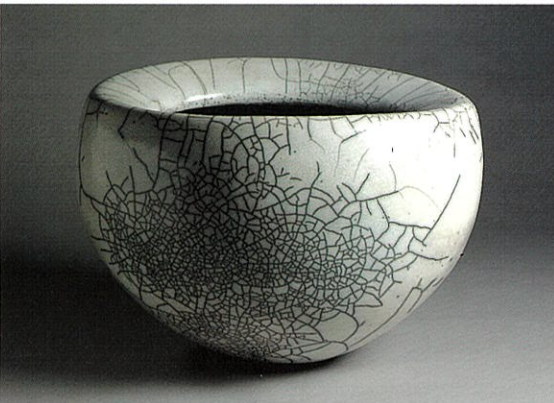
ローベルト・シュトゥルム [彫刻] 1989



ペアーテ・クーン [水の華] 1999 [水生植物] 1995 [水一有機体] 1999



ハイディ・マンタイ [キマイラ(器)] 1998



マルティン・ミンダーマン [大きな器] 1999



モニカ・デブズ [器のフォルム] 2000

制作鑑賞券  
100円引き